

山 梶 子 談 議

正 員 柳 沢 米 吉*

1月31日私は海上保安庁長官という職を辞した。そして官吏の生活を後にしたときいわゆる感無量という感じを胸一杯に感じた。25年の生活は長いようでやはりあつという間であつた。あつという間に過したこの半生のうち、胸に残る陰は言いたいことを言い、やりたいことをやつてきた自分の我儘、我執がやはり気になることだ。この私の性格のため、どれだけ多くの人気が分を悪くし、また傷ついてもいることか、思うだけ嫌な気持ちになる。「人間は過誤の動物である」と割切つてしまえばそれまでだが、少なくとも科学の道を歩む一技術者としては理屈に合わない恥かしいことだと思う。ことに自ら自己の頭の力の限界を見出し、大自然の前に愚かな赤裸々の自分を投出し、そしてただ大自然の直接の啓示を得んものと、進んで土木の道を選んだ自分に見れば、ひとしほその罪の深さを思い知る。25年前空つ風吹き荒ぶ上洲を出て、無限に続く紺碧の海原を友とする港湾技術屋として第一歩を踏み出した当初は、私の望んだ自然の神秘の扉はすぐ開くがごとくに見えた。そして自然の支配すらできるのだと思つたりした。いまにして思えば、その頃の私は富士の裾野に立つて富士を理解したと同じだつたのかも知れない。それをはつきり知つたのは大陸での生活だつた。海河の塘沽築港、茫洋として数千年数万年の歴

史をいやというほど身にしみて感じさせる大陸の自然人……。私はただ我武者羅に仕事に取つくほかなかつた。なるほど、飛びつけばつかまらしてはくれる。しかしそれでびくとも動いてはくれない。自然の際限のない奥行というか、無情さでもいふのであろうか。しかし私は涙を流して喜んだ。私はこの時こそ始めて土木技術者としての生甲斐を感じたからだ。そして私が身につけている技術がいわゆる秀才の技術であり、Willkürの技術に過ぎないことを知り得たからだ。私の技術に対する自らの背信はまもなく始まつた。私の眼前に現われた自然の機会が別なものであつたなら、あれほどの我儘気儘はあるいはもつと違つた形で表われたのかも知れない。しかし、所詮どんな道を歩んでも万物を生む自然はまたむごい母であることを知つてゐる。私がどんな成行に身をまかせても自然は私を相手にはしてくれないだろう。それを思うからこそ押通した自分の我儘と我執が気になつてくるのだ。私は山村の生家に帰つて庭の山梶子の花を眺め、ひそかに自らの号とした。そしてこの花のように私の第二の人生が楚々としてしかも真実でつつまれてるように自ら念じたのである。またそうすることが、私を育ててくれた港湾いな日本の土木技術に対して何かいいことをしたように思えたからである。

UDC 628:061.22(73)

米国工学百年祭、衛生工学部会報告

正 員 工学博士 岩 井 重 久**

1. ま え が き

昭和26年6月以来、衛生工学研究のため米国に出張中、昭和27年春、滞在地 Cambridge, Mass. において大西会長(当時)より、9月上旬に Chicago で開かれる米国工学百年祭に、わが学会代表の一員として出席するよう、依頼状を受取つた。早速その準備委員

会とも連絡をとり、滞米を延期して帰国の途次列席することにした。

Chicago では福田武雄教授を始め、伊藤、村、清野の諸氏や国鉄の江藤局長、齋藤氏とも落合い、ともにこの祝典に列し、講演その他種々の行事に参加したのは喜びにたえない。米学会に対するわが学会からの善意がこうして伝えられたと同時に、諸外国よりの多数参加者ともこよなき親ほくが随所に交歓されたのは

* 前海上保安庁長官

** 京都大学教授、工学部土木工学教室